

社会保障教育の推進に関する検討会第1回配付資料

書籍「15歳からの社会保障」のご紹介

NPO法人Social Change Agency

社会福祉士

横山北斗

自己紹介

横山北斗

社会福祉士・社会福祉学修士

NPO法人Social Change Agency代表理事

ポスト申請主義を考える会 代表

【現場実践】

大学卒業後、医療機関にて患者家族への相談援助業務に従事後、社会保障制度の申請主義に問題意識を持ちNPO法人を設立。2021年より、社会保障制度のアクセシビリティの向上を目的とした情報発信やオンライン相談支援事業、自治体との協働事業を開始。2022年11月に「15歳からの社会保障（日本評論社）」を出版

【教育実践】

武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 非常勤講師（2022～）

【委員など】

内閣官房孤独・孤立対策担当室HP企画委員会（2021～）

こども家庭庁設立準備室 未就園児等の把握・支援のためのアウトリーチの在り方に関する調査研究検討委員会座長（2022）

こども家庭庁 幼児期までのこどもの育ち部会 委員（2023～）

刊行の背景 -申請主義による社会保障制度からの排除の現状-

社会保障制度の利用プロセスにおけるさまざまな障壁の存在

ダブルワークや家族のケアなど多忙で、調べたり、相談や申請に行く時間が取れない



制度の存在を知らない / 探すことが難しい



制度の内容（受給要件など）の理解が難しい



申請に必要な書類を揃えることが難しい



制度利用に対するステイグマ



申請書類を記入することが難しい

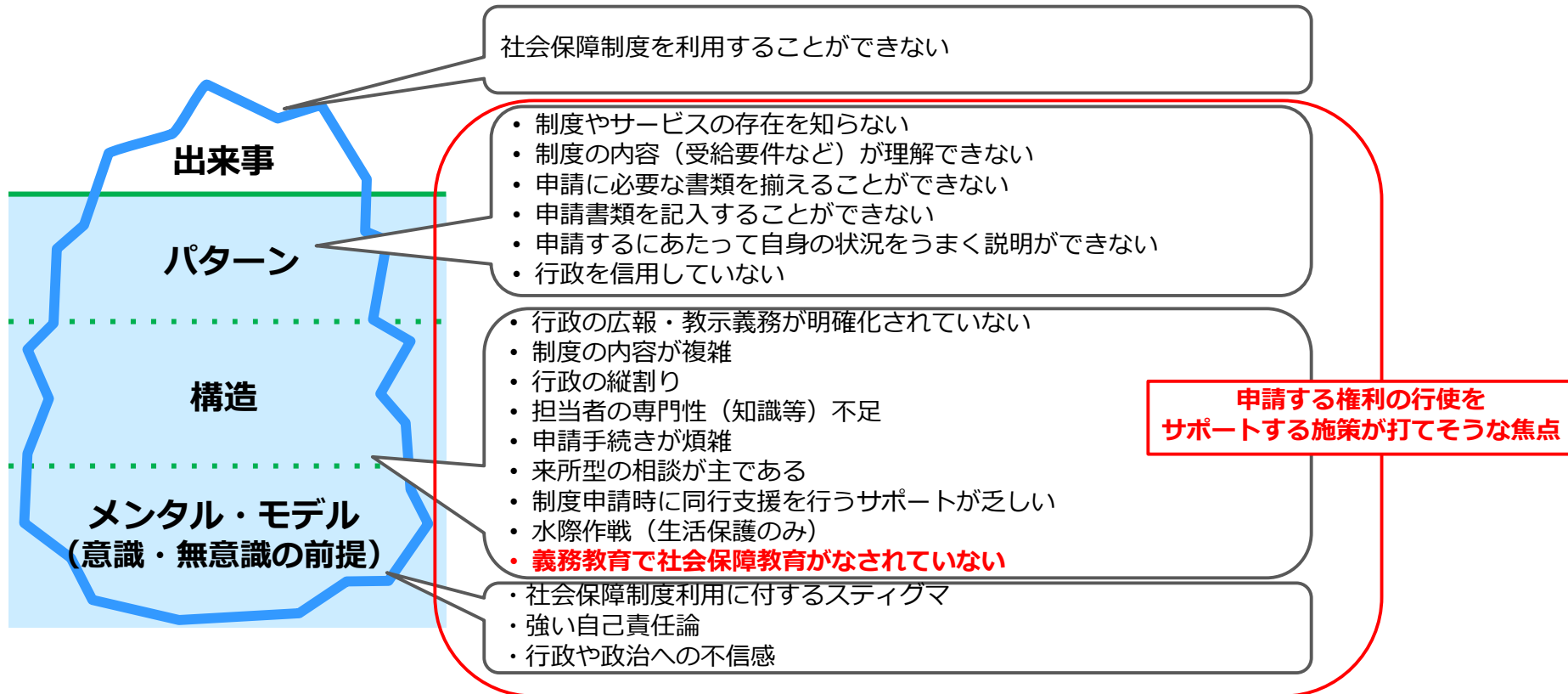


自分の状況をうまく説明することが難しい



刊行の背景 -申請する権利の行使をサポートする必要性-

社会保障制度の種類や内容について知る機会が乏しい現状をどうにかしたいと考えました



刊行の目的と内容

義務教育修了前に社会保障制度を知る機会をつくり、人生で困ったことが起きた時に、「そういえばなにか手助けしてくれる制度があったな」と思い出してもらえることができるよう、そのようなきっかけをつくりたいと考え、刊行しました

内容

10代-40代の登場人物に起こる出来事を通して、社会保障制度を紹介するという内容を、10遍のストーリーで構成しています。貧困、家族の介護、若年での妊娠、突然の事故や死別、家族からの暴力などに直面した登場人物それぞれが、さまざまなきっかけにより社会保障制度の利用に至るといった短編集になっています。

目次

- 1 ケガで仕事を休まなくてはならず、医療費と生活費に困ったユウジ
- 2 アルバイトができなくなり、生活費や家賃の支払いに不安を抱えているサトシ
- 3 住む場所がなく、食べるものに困ったシンジ
- 4 高校生で妊娠し、生活に困ったママ
- 5 ひとりで子どもを育てることになったマサト
- 6 発達障害の子どもを育てるジュンとマコ
- 7 会社でハラスメントを受け、体調を崩したエミリ
- 8 交通事故で車イスが必要な生活になったノブオ
- 9 おばあちゃんと弟のお世話をしなければならないサクラ
- 10 家族から暴力を受けているミユキとトモキ



日常生活でピンチに見舞われた10人のストーリーを通して、社会保障制度がやさしく学べるあなたや大切な誰かを守るために知っておこう。学校では教えてくれない、生きのびるための大切な知識。

苦境から抜け出すのに使える制度はこんなにあった。不安と孤立の時代に最も必要な本。

宮本太郎
（中央法規出版編集）

2022年11月 日本評論社より刊行

刊行の目的と内容-物語を採用した理由と物語構成の方法-

社会保障制度という固いテーマを読み切っていただくために以下の流れで構成執筆しました。

- (1)200程度の制度を生活場面ごとのカテゴリで整理する
- (2)登場させる社会保障制度を決める
- (3)登場する制度に関連した生活上の困りごとを決める
- (4)上記を踏まえて登場人物の設定を決める
- (5)物語を書く

ピンチからのリカバリーのプロセスを描くことで、制度単体ではなく、制度を利用する前後関係をイメージしていただきながら、読み手に追体験（記憶に残りやすくなるように）してもらえるように意図して物語を書きました。

アルバイトで生活費をかせぐ 大学生のサトシ

「はあ……」都内の大学3年生、20歳のサトシは、通帳の残高を見てため息をついた。ATMの外に出ると、乾いた風が体全体をおおった。今朝の天気予報は、最高気温は37度を超えると言っていた。

サトシは将来、リハビリの専門家である理学療法士になるために学んでいる。両親はサトシが3歳のときに離婚、父とは離婚後一度も会っておらず、連絡先もわからないまま。母は医療事務員として病院で働きながら、ひとりでサトシを育てた。サトシは幼い頃から心臓の病気を患い、リハビリを担当してくれた理学療法士に憧れ、同じ職業を目指そうと決めた。

母はサトシが理学療法士として働く日を楽しみにしてくれていたが、一昨年、乳がんが見つかり、昨年亡くなった。母の葬式は、生前、母と仲良くしていた友人たちとともに執り行った。母が多くの友人に恵まれていたことは、悲しみの中でも、サトシにとってうれしいことだった。

母の死後、祖父母もみな亡くなっており、サトシを経済的に支援してくれる親戚はいなかった。遺族年金（110頁参照）はサトシが当時19歳だったので受け取ることはできず、母は民間の生命保険などにも入っていなかったため、保険金がおおりることもなかった。そのため、サトシは学費を奨学金で支払い、生活費は、母が残してくれた貯金、整形外科医院でのリハビリ補助のアルバイトの給料でやりくりをしてきた。

リハビリ補助のバイトは、大学の黒木先生が紹介してくれた。学生のときから医療やリハビリに関係するところで学びたいと思っていたサトシにとって、願ってもないバイトだった。時給もよく、生活費の面でも助けになっていた。サトシは、国家資格取得に向けた長期間の実習をはじめる前にバイトをたくさん入れ、生活費に余裕をもたせておきたいと考えていた。今日もこれからバイトだった。

持病の悪化

「お疲れさまです！今日もよろしくお願ひします」

あいさつしリハビリ室に入ると「サトシくん、今日もよろしく」と理学療法士の坂本さんが声をかけてくれた。黒木先生の病院勤務時代の後輩だ。サトシは今日も坂本さんの補助につき、患者さんのリハビリのサポートを行った。

リハビリ補助のバイトを終え、医院の外に出ると、オレンジ色の夕焼けが見えた。自転車にまたがったとき

本書における工夫

各章の主人公の描写

主人公を弱き人として描かないことを徹底しました。弱いから制度を利用するのではなく、それが権利であることを登場人物にも語らせ、この物語の主人公は、わたしかもしれない。あの人かもしれない。そのように少しでも感じてもらえるよう登場人物の心理描写を盛り込みました。

本書を通して社会保障制度を知っていただくこととトレードオフで、人々を抑圧する社会規範や社会保障制度利用に付するスティグマを強化してしまったのでは本書を記した意味がありません。この点は、本書に徹底する制約条件として設定し、強く留意した点になります。

各章のおわり、巻末の制度一覧の表記方法

利用する側を主語とする説明文章に統一しました。例えば、相談窓口に関する説明も、よくある自治体主語の「あなただけの支援プランを作ります」等ではなく、「お金や仕事や家族について相談できる」とするなど、利用する側を主語とする説明文言としました。

制度窓口の探し方

自治体によって窓口の名称が異なることがあるため、ネット検索をする際のキーワードを例示しました。

このエピソードで紹介した制度

自立相談支援機関

概要

お金、仕事、家族など、生活全般のことについて相談ができる窓口

内容

アドバイスや社会保障制度の紹介、利用するためのサポートなどを受けることができます。

条件

相談は無料です。

窓口

住んでいる市区町村の自立相談支援機関（名称が市区町村によって違うので注意してください）

*家がない場合、生活している市区町村の最寄りの自立相談支援機関に行く、もしくは電話をしてください。

窓口の探し方

インターネットで調べる場合は「自立相談支援機関+住んでいる市区町村名」で検索してください。

住居確保給付金

概要

家賃のサポートを受けることができる制度

内容

- 3ヵ月分の家賃のサポートを受けられます。
- 延長は2回まで最大9ヵ月間（2022年11月時点）
- 金額は市区町村によって異なります。
- 給付（もらえるお金）のため、返済の必要はありません。

出版後の反響と今後の展開として考えていること

反響（読者、学校関係者、メディア等）

- 中高校生から「生存権という言葉が具体的にどういったことを意味しているのかがわかった気がした」、「生活保護に最低生活費という基準となる金額が決まられているのをはじめて知った。働けない人が利用するものだと思っていた」、「こんな大事なことをなぜ学校で教えてくれないのか」などの感想をいただきました。
- 住んでおられる自治体の全ての小中学校の図書館に寄贈して下さった成人の方がいらっしゃいました。
- こども若者の居場所に自主的に配架して下さる方や、大学生が個人で、本書を活用して、地域の中学生に社会保障制度のレクチャーをして下さるなどの自主的な取り組みをはじめられたりもしています。
- 図書館に入れて下さる中学高校が少しずつ増えています。
- 専門学校や大学の授業の副教材としても活用されはじめています。
- 朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、東京新聞、上毛新聞、そのほか地方紙8紙（共同通信社配信記事）にて取り上げられました。

今後の展開として

- 学校現場での社会保障制度のメニューの存在を知る機会の拡大を検討しており、東京都教育庁主管の「都立高校生の社会的・職業的自立支援教育プログラム事業」において、社会保障制度についてのプログラムを提供すべく現在準備中（所属法人として）
- ほか、本テーマに関心のある先生方の協力を得ながら、学校現場で社会保障制度に関する出前授業などを検討

参考資料) 申請する権利の行使をサポートする施策を検討する上での具体的ポイント

ポイント	施策例
情報の入手	<ul style="list-style-type: none"> ・ 公的支援制度や相談窓口に関するポータルサイトやナビゲーションシステム <p>国民目線で生活場面に即して整理した情報を平易な言葉で掲載し、国の制度やその情報に誰もがアクセスできるようにするサイト、自身が利用できる制度の理解を助けるナビゲーション機能の実装</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・ プッシュ型情報発信 自ら調べなくとも、個々の状況にあった利用可能性のある制度・支援情報を自治体が知らせてくれる。 ※千葉市は2020年1月より「あなたが使える制度お知らせサービス」開始。健康診査や子育て支援関連手続きを中心にLINEを活用しオンラインでのプッシュ通知を実施。 ・ プッシュ型の給付 自ら調べなくとも、利用できる現金給付の制度を申請書が自治体から自宅に郵送されてくる。 ※公的給付の支給等の迅速かつ確実な実施のための預貯金口座の登録等に関する法律に基づく「特定公的給付」に定められた給付は、自治体がマイナンバーを利用し、受給対象を確認することが可能。対象給付は限定的。
申請手続き	<ul style="list-style-type: none"> ・ 申請方法の多様化・簡素化、申請を不要にする（デフォルト申請） <p>例：オンラインでの申請 / 郵便局、病院などで申請ができる / 口頭、書面等による申請が受理された後に必要書類を提出</p>
申請窓口	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワンストップ相談の実施、福祉関連部署における専門職の採用 / 人数の増員
情報が届きづらい人との接触機会	<ul style="list-style-type: none"> ・ オンライン/オフラインのアウトリーチの実施 / 行政等によるアウトリーチの強化（法令、ガイドラインの策定等）
申請を伴走支援する仕組み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 上記施策等をもってしても制度の申請が難しい方をサポートする人的な申請支援の仕組みの構築 ・ 自治体による、民間のNPOや弁護士団体などの伴走支援団体の積極的広報
スティグマの軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・ 制度利用に伴うスティグマの軽減を目的とした施策、制度の利用を促すための啓発や制度名称自体の変更など